（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　曲（きょく）　莉（り）

本論文は国木田独歩がワーズワース、徳富蘇峰の影響を通して「詩」「詩人」に関する独自のイメージを構築し、それが「小説」の方法として創作に生かされていくプロセスをたどったものである。

構成は明治二〇年代に独歩の文学観が形成されていく過程を分析した第一部と、具体的に三編の小説を分析した第二部とからなる。第一部第一章では、独歩のワーズワース受容が徳富蘇峰を介してのものである点に着目し、蘇峰の「田舎漢」という概念が独自の「小民」思想に組み替えられていく過程がたどられている。第二・三章では、独歩が参照したワーズワースのテクストが実証的に検証され、モーレー、アーノルド双方のワーズワース理解が踏まえられていた可能性が指摘されている。第三章では独歩の評論『田家文学とは何ぞ』に着目し、“How to live”というアーノルドの言が、蘇峰の影響を受けつつも、そのプラグマティズムとは異なる理想主義的な観点から再解釈されていくプロセスが指摘されている。続く第四章ではさらにこれを踏まえ、独歩が「愛と誠と労働」の社会的実践を文学者の責務として認識していく道筋がたどられている。蘇峰の社会改革論に根ざした功利的文学観が、その影響を受けつつも、独歩にあっては「救世済民」に根ざした人間の内面世界の追求、という特異な「詩人」観、文学観に組み替えられていった、という主張は、同時代の人生相渉論争に代表される「想」「実」二元論を克服していく可能性を掘り起こしたものとして、注目に値する見解と言えよう。

第二部第一章では初期の小説『源おぢ』を対象に、先行する小品『たき火』との比較を通し、ワーズワースの影響を受けつつも、無垢な世界の頓挫を作中に組み込むことによって、異なる世界が構築されていく様相が明らかにされている。第二章では、『画の悲み』を対象に、「幼時の回想」という方法によって、「自然」に人生の実存的な問題が収斂していく構造が、フィクショナルに立ち上げられていく過程が分析されている。これらを踏まえ、第三章ではこうした、方法としての「回想」がさらに高度な達成を示した作として『少年の悲哀』が取り上げられ、「自然」との一体化が歓喜としてではなく、「悲哀」として描かれる点に、ワーズワースとの差違が見据えられている。

独歩の創作活動の総体を検討対象とするには、『武蔵野』『忘れ得ぬ人々』など、なお取り上げるべき重要な作品が残されているが、徳富蘇峰に代表される同時代の文学観とワーズワースの自然観とが撚り合わされていく足跡を詳細に分析した独創性は高く評価される。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。